

サイクリストであり、男性でもある私は、道路を女性にたとえるクセがあります。たとえば、荒っぽくなるべく避けたいタイプ、地味で決して視線を奪われないけれど、いなければ生きていけないタイプ、気合いを入れた服装で会いたい魅惑的な曲線美をもつタイプ、雑誌の表紙に出てくる夢のようなタイプなどが存在します。北海道にはこのような道路も、そしてこのような女性も存在しますが、残念ながら女性については語るほど経験がないので、道路のみについて話させていただきます。

曲線美にぞっこん

デーヴィット・バーネット【David Barnett】



フランス、オランダ、そして母国のイギリスではいろいろな道路をかなり長い距離、自転車で走ってきました。でもこんなに道路に対して熱くなったのは、1987年に初めて北海道に来てからです。北海道のいたるところを自転車で走り、毎年5000~8000キロ、通算走行距離は14万キロを越えました。車でもその倍は走っていますが、記憶に残っているのは全て自転車の思い出です。

北海道の道路は海外と比べるとどう違うの?とよく聞かれますが、それは女性と同じで簡単には言えません。フランスでは初めての右側通行だったので、かなり緊張していました。慣れるまで神経を使っていたため、道路の良さはなかなか実感できなかったように感じます。オランダでは自転車専用道路が多く、本当の「道路」に出会うチャンスが少なかったと思います。専用道路はもちろん良い面もありますが、サイクリストにとって全ての問題を解決するわけではありません。

私は基本的に「道路」は皆で共有するものだと思います。オランダの自転車専用道路網は特にすばらしく、どこへでも行けるシステムですが、日本の自転車専用道路は自転車を社会から離してしまうケースが多いと感じます。河川敷や山の中に専用道路を作り、「自転車はここで遊んでね」と言っているような扱いです。自転車は遊び道具でもありますが、生活のための立派な交通機関でもあり、街のあらゆる場所で社会の一部として認められるには、完全に区別するのではなく共存すべきだと思います。

イギリスの道路を思い出すと、道路自体は北海道とあまり変わらないかもしれませんが、自動車の運転手の態度によっては、サイクリストにとって決して良い環境とは言えません(男性としてもイギリスは良い環境とは言えませんが、この話は遠慮させていただきます。笑)。

本来の話へ戻りましょう。北海道では、避けたかったけれど避けられなかった道路と何回も出会い、辛い思いもしましたし、地味な道路にも毎日のように出会っています。特に、最近の市街地では整備不良でひどい場所もありますが、北海道の気候のハンディを考えると少なくとも年間4ヵ月は雪や氷に埋まり重機等に削られていますから、全体的には良い方だと思います。これも女性と同様に、厚化粧のおかげで何とかなっているとと言えるでしょう。

私は週に数回、とっておきの勝負服を着用し、魅惑的な曲線美との出会いを求めて出かけます。20数年間で素敵な出会いは沢山あり、特にそのいくつかは今も忘れられません。たとえば、道道66号線岩内一洞爺湖のニセコパノラマラインの官能的なカーブ。然別湖半に沿って走る道道85号線にある涼しい葉っぱのトンネルを走り抜ける爽快感。ウキウキ気分で歌いながら走りました。釧路近辺、阿寒湖に向かうある雨の日のワイルドな禁断の出会いも素敵だったし、そして何よりも開通したばかりの国道274号線の石勝樹海ロードを早朝、独り占め状態で走った時は、舗装して間もない路面がなめらかな絹の肌のように、とたんに恋に落ちました。

道路は男のロマンを広げるツールの一つです。子供のころに地図を見ながら夢中になっていたころと、今も変わりはありません。最近の道路の「整備」はありがたく、それで随分便利になりましたが、同時に何かが失われた気がします。もちろん一部の「整備」はサイクリストにとっても嬉しい面があります。特に、高速道路や幹線道路を使う車が増えれば、峠や旧道を使う車が減って自転車はもっと走りやすくなるでしょう。でも、「整備」で失われた、涙が出るくらい懐かしい素敵な道路もあります。朝里一定山溪線の朝里峠がその一つです。朝里側から上っていくと、確かに安全で楽になりましたが、左下の旧道をちらっとみると思い出します。あの絶妙なヘアピンが続く一番きついところ、セミの声と自分の心拍音しか聞こえない、頭の中でツール・ド・フランスの山岳賞を目指しているような、懐かしい自分の姿を思い出します。現在の特徴の無い道路は、まるで愛した彼女が強制美容整形をさせられ、魅惑的な特徴をなくしたように感じます。

道路が安全になるのは良いことですが、ときには心拍が上がるような刺激も必要です。男性として、そしてサイクリストとして、ドキドキするような出会いが欲しいのです。北海道の道路には、なめらかな肌と魅惑的なカーブがまだまだ数多く残っていることを信じたいと思っています。



David Barnet ■ プロフィール
イギリス出身、札幌在住23年以上。NPO法人ワールド・ユース・ジャパン理事でもあり、日英翻訳、通訳、英文校閲・編集、ナレーションなどを行うかたわら自転車で北海道中を走り続けている。ツールド北海道の通訳を務める。